

ゆうきの酪農に密着!!

実は昔から畜産業が盛んな結城市。3代続く酪農家の落合さん(前法内)は、家族で営農しており、搾乳牛50頭・育成牛20頭・肉用牛として繁殖和牛6頭を飼育しています。

今回は落合さん一家に、酪農の仕事内容や酪農への思いなどを伺いました。



のりゆき 慶之さん・えいたろう 瑛汰朗くん・かなえ 佳菜江さん・りつき 俐月ちゃん・はるみ 晴美さん・こうさぶろう 耕三郎さん・ヤンさん(実習生)

残してくれた“思い”を継ぐ (慶之さん)

ゆくゆくは農業に携わりたいとの思いもあり、大学卒業後はサラリーマンとして農業関係の仕事を経験した後、昨年6月から就農しました。

“家業を継ぐ”というような大それた思いはありませんが、両親がここまで規模を維持しながら残してくれたからこそ継ごうと思えましたし、感謝しています。

これからは農業にも「働き方改革」が必要です。現在、就農人数は実習生を含めて4人ですが、組合や個人契約のヘルパーなども雇い、なるべく休日を確保するようにしています。無理に拡大せず、まずは現状を維持しながら、バランスのいい酪農をしていきたいと思っています。

毎日仕事があることが“幸せ” (晴美さん)

私は非農家から嫁いだので、最初は昔ながらの3K(キツイ・汚い・危険)のイメージがありました。でも実際は、生き物を育てることの喜びや感謝の気持ちの方がずっと大きかったです。

酪農は365日、毎日仕事がありますし、牛の出産時などは昼夜関係なく対応します。でも、今は逆に、毎日仕事があることを“幸せ”に感じていますし、これからは安心・安全な牛乳を届けたいと思います。



いくつもの“困難”を乗り越えて (耕三郎さん)

昔は近くに集乳業者があり、牛乳を売ればすぐ現金収入になるので、小規模の酪農家が市内に40~50軒はあったと思います。今は5軒のみになりました。

1999年の東海村JCO臨界事故や、2011年の東日本大震災の際は、放射能の問題で茨城県の牛乳にも出荷規制がかかったのですが、牛は毎日搾乳しなければ乳房炎を起こすため、搾った乳をその場で捨てていました。無念というより、くやしい気持ちでしたね。

息子に継がせる気はあまりなかったのですが、困難にも諦めずに続けたからこそ今がありますし、継ごうと思ってくれたことは素直に嬉しい気持ちです。



1日の仕事の様子



5:30~ 16:00~

牛舎清掃・給餌(エサやり)



エサは粗飼料(乾牧草)や配合飼料(トウモロコシなど)などをあげます。レーン上を自動で動く機械によって、決まった時間に給餌しています。

6:30~ 17:00~

搾乳(乳搾り)



「ミルカー」という搾乳器で乳を搾ります。搾られた乳はそのままパイプを伝って、空気に触れることなくバルククーラー(生乳を冷却保管するタンク)に貯蔵されます。



9:30~

集乳



茨城県酪農業協同組合連合会のタンクローリーが毎日集乳に来て、低温に保たれたままクーラーステーションから生乳工場に運ばれます。現在は、1日約1,300リットルを出荷しています。

12:00~

自給飼料



ラッピングした牧草を与えます。

<1日の主な仕事>

- 5:30 ●牛舎清掃
- 給餌
- 8:30 ●搾乳
- 9:30 ●集乳
- 11:30 ●自給飼料
- ふん尿処理
- 13:30 ●バルククーラー(生乳を冷却保管するタンク)の清掃
- 16:00 ●牛舎清掃
- 給餌
- 19:00 ●搾乳
- 仕事終了

繁殖



スマートフォンのアプリなどを使って、獣医師と情報共有しながら、一頭一頭細かく繁殖管理をしています。

分娩



母牛は人工授精により妊娠・分娩することで、乳を作り出しています。そのため牛のお産は年間50回近くあります。また、育成牛の半数は北海道の牧場に預託して育てています。

その他

牛のふん尿は、乾燥させ堆肥として野菜の土づくりに利用されています。また、削蹄師によるつめの管理も欠かせません。